後世に体験を語り継ぐ災害記録誌の編纂
「あの日あの時 ～平成21年8月9日の記憶～」

佐用町久崎自治会

平成21年8月9日濁流が集落を飲み込んだ

平成21年8月9日は朝から雨が降り続き河川の水位も増していましたが、夕方には雨は小康状態となり、しばらく晴れ間も見られました。しかし、災害を危惧する気持ちが安堵したのも束の間、バケツをひっくり返すような豪雨が降り注ぐ事態となりました。

時間雨量89mmという当地方にとっては記録的な雨が容赦なく叩きつけ、集落の上流部の堤防は増水に堪え切れず決壊し、凄まじい勢いで濁流が集落に流れ込みました。

堤防が決壊したことにより、蛇行していた川は町の中心を一直線に進むこととなり、辺り一帯は川と同化しました。

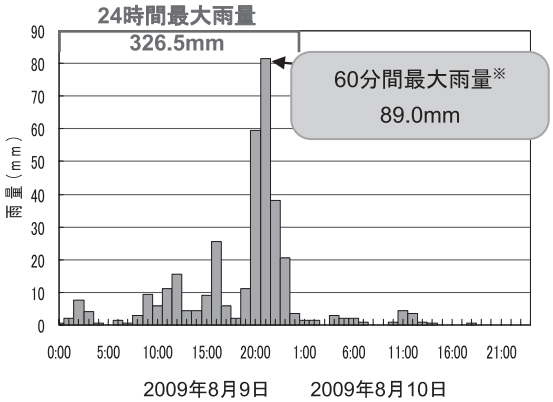
一夜明けると集落は見るも無残な風景と化していました。久崎集落内での最高浸水深は約3mに達し、全世帯の8割以上が半壊以上となる、明治以来、記録で残る上で最大の被害となりました。

体験談より・・・

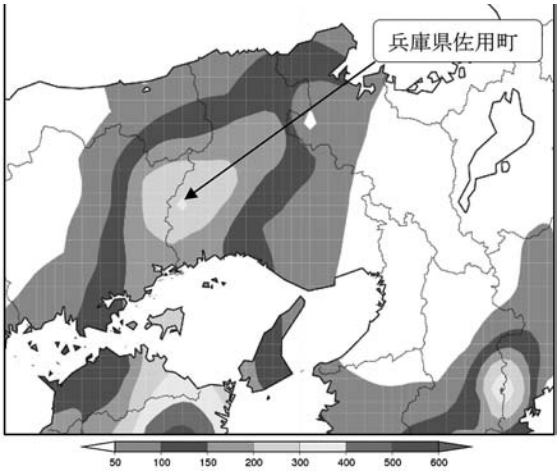
・避難しなければと思っているうちに床の下にブクブクと音がして水が入ってきた。

・あの日の水は予想もできず、手の打ちようもありませんでした。(中略)サイレンが鳴ったあとは、何で家が水の中にあるのか、いつ、水が入ってきたのかもわからない程で・・・・。

佐用(気象庁)雨量観測局



※ 時間最大雨量は毎正時(20時～21時)の時間最大雨量
※ 60分間最大雨量は分単位(20:17～21:17)の時間最大雨量



私たちが住む久崎というところ【災害と戦う歴史】

兵庫県佐用町は県の南西部に位置し、岡山県に隣接する町です。私たちが住む久崎集落は佐用町内の南部に位置し、本流である千種川と支流の佐用川の合流地点にあり、災害の危険が及ぶことが危惧される地域です。実際に明治時代にも水害の記録があり、昭和51年、平成16年にも災害に見舞われています。その度に住民は歯を食いしばり復興し、地域を守ってきました。しかし、平成21年災害は、5年前に起きた百年に1度といわれた平成16年災害からわずか5年後に起きた災害でした。

平成21年災害が住民の心情を苦しめたのは、先の

災害から立ち直った直後であることからくる、絶望感、無力感でした。その上に毎日の災害の後片付けの作業がもたらす疲労感、そして、これからの生活に対する不安感。さまざまなストレスが住民を苦しめることとなりました。

体験談より・・・

・1階の光景を見て呆然とした。足の踏み場もないほど物が倒れ、泥に埋もれ、外にも出れない状態だった。
・ごうごうと唸る濁流の音の中での悪夢の一夜でした。それでもこの久崎で犠牲者の出なかったことが不思議であり、度重なる経験が生かされたのでしょうか。
・翌日、久崎では被害者が出なかったらしいと聞き、驚きました。いくら水になれているとはいえ、あれだけの水位まできたのだから。
・水害後は来る日も来る日も泥との格闘。その中で度々、マスコミにマイクやカメラを向けられ辟易。(中略)疲れとストレスの毎日だった。家の修復の目途がついた時はもう年末になっていた。

犠牲者ゼロの奇跡

この災害での被害は、佐用町内の多くの地域で起きており、農地、道路の被害はもとより死者行方不明者は20名となる大災害となりました。

しかし、当集落は、町内の下流域に位置し、水害の浸水が最も深かったにもかかわらず、幸いにも人的被害はありませんでした。そのことは本当に住民にとって何よりもかえがたい救いとなりました。

そのような中ですべての人が安全に一夜を過ごしたわけではもちろんありません。大部分の方が水の脅

威を感じて夜を過ごしました。さらに、その中にも九死に一生を得たというかたは多数おられます。実際には、あの日、あの時、豪雨と濁流の中、様々な命に関わるドラマがあったことは否めません。

体験談・聞き取りにより・・・

・外に出ると、自宅裏の堤防が決壊したのでしょうか、濁流が流れ込んできました。とっさにベランダ前の松を踏み台にして電柱に取り付き(中略)まもなく、眼下は水かさ2mを超え、大河の真っ只中に居るよう。
・水の流れに足を出したとたん、足を滑らせて流された。(中略)すんでのところで息子の手が私の手をつかんだ。まさに危機一髪であった。私を引き寄せた息子の手が力強かった。
・ほぼ寝たきりだった私が寝ているベットは、畳と一緒に浮かび上がり、天井で梁につかまる事で助かることができた。

立ち上がった住民有志
～記録誌作成へのきっかけ・・・・～

水害後、それぞれの家の片付けが一段落すると、集落内でのあいさつは「大変やったなぁ」からはじまり、水害時のさまざまな体験が次々と語られることとなります。

また、2ヶ月が経った頃に、住民の有志により開催された、さまざまな復興イベント会場などでも、いたるところで、会話の輪が生まれ、各々が被災体験を語り、命が助かったことを喜び合う姿が見られました。その中で住民が語る体験談の一つひとつが将来に残すべき貴重な財産だと感じられました。被災体験は被災者が日常生活へ向かう過程で徐々に薄れていきます。記憶が風化しないうちに、是非とも記録として残す必要を感じました。

復興イベントそして語らう住民

命を救った過去の経験・体験

久崎集落は昔から川と密接に関わってきた地域でした。近世からは高瀬舟による舟運により栄えてきた歴史もあります。何よりも住民の中・高齢者は川を遊び場として成長しました。

遊び場といえども自然であり、時には夕立による増水に遭遇することもあったでしょうし、親をはじめ大人たちは二つの河川に挟まれる地域性から水の恐ろしさも教えてきたと思います。

皮膚感覚として、川の楽しさと怖さを住民は知っていたのかもしれません。

また、平成16年に起こった災害も、忘れかけている皮膚感覚を蘇らせたのかもしれません。体験集にも前回の水害の経験をもとに今回行動したことが書かれています。

前回、道路に水があふれる中、避難し危ない目に遭い怖い思いをした人は、今回避難しようとした時に既に道路に水が溢れていれば、避難所に向かわず、自宅の2階や、近隣の2階に避難しました。

経験や体験がいかに大切か、今後の防災対策に重要な要素であると考えられる事例であると思います。

もう一点、近年子ども達が川で遊ぶことのできない状況が作り出されており、昔の様のように川に親しむこ

地域で開催されている親水イベント「ちちこ釣り大会」

とが困難となっています。子ども時代に体験する川の楽しさや怖さは一生、皮膚感覚として体に残ります。今後、ますます川に親しむ機会は減少していくことが想像されますが、私たち大人は積極的に川で遊ぶ体験を子どもたちに提供していくことが重要だと思います。

体験談より・・・

・水の怖さは十分経験しているだけに、雨に対してはいつも気になり、隣近所同士で情報を共有してきました。しかし、今回だけは別。気づきた時にはもうひどい状態。はげしい雨音に緊急放送は勿論、サイレンさえ聞きづらい状態でした。それでも避難所へ向かったが、どす黒い水に押し戻され、やっとの思いでまた家に帰り着きました。

復興へ向かう気持ち「支えられ　助けられ」

二度に渡る災害に打ちひしがれた住民を救ったのは、ボランテイアの力でした。

16年災害時はマスコミ報道も少なく、各自自力での復旧でしたが、21年災害では報道のおかげもあり、全

復興への一歩をアシストしたボランティア

国各地から多くのボランティアのかたが駆けつけてくださいました。

夜が明けて見るも無惨としか形容しがたい我が家を前に呆然とした住民がどれほどあったことでしょうか。5年前の経験があるとはいえ、あまりのやるせなさに作業の手が進みません。止まりかけそうになる作業の手を、動かしたのがボランティアの力です。

「もうどうでもいい」全部捨ててしまおうと思っていると、使えるものは使いましょうと泥まみれの日用品を洗ってくれた人。少しでも気持ちいい環境にしましょうとリビングを根気よく磨いてくれたかた。

ボランティアの力は災害に打ちのめされ、くじけかけた被災者の気持ちを立ち直らせてくれました。

感謝！の一言に尽きます。

体験談より・・・

・5年前はボランティアのかたの力はなく・・・(中略)今回はおかげでボランティアの方々に手伝っていただき、本当に助かりました。片付けがすむまで、何人もの方々に骨身を惜しまず、真夏の高温のなか、助けていただき、どうお返ししたらと、思っています。

・振り返って何よりもボランティアの方々に心から感謝。

体験を語り継ぐこと

災害による犠牲者が出なかったこと、その事実は奇跡とも考えられますが、経験による判断とも言えると思います。

そのとき住民は各々の考えでどのように行動したのでしょうか？

～住民の避難の例～

・油断せず早めの避難をしたひと

・濁流の中避難を試みたひと

・自宅の2階や近隣宅の2階への避難を判断したひと

平成21年災害では結果的に自宅の2階や近隣宅の2階への避難をした垂直避難が有効となりました。当時、災害研究者などが垂直避難の優位性について発言されたりもしましたが、実際には逃げ遅れた最後の冷静な判断であったと思われます。流れる水の勢いの怖さを何より久崎集落の住民は理解していたのだと思います。

災害記録誌の中では、様々な人が反省を語っています。住民の行動のすべて正解ではなかったことが読み取れます。このような経験が語り継がれることで、減災に継がることを望みます。体験談には、成功も失敗も語られています。多くの人が事あるごとに手に取り、読み返すことにより自己防衛に備え人に伝えることにより地域防災力が高まっていくと思います。

今回作成した災害記録誌が、今後、防災教育に活用されたり、他地域の防災に少しでも活用されていくことを望みます。

災害を語り継ぐこと、そして・・・
～防災ツーリズムの実現へ向けて～

災害が起こった地域に訪れ、その災害を学び、自分の住む地域の防災に役立てようという、考え方があります。すでに、災害後多くの団体が当集落を訪れ、何かしら得るものを得られ帰られているものと考えています。

説明を行う当集落住民にとっては、災害時の様子や住民の行動を視察者に説明することは、被災体験を風化させることなく、災害時の行動理念を再確認する意味においても地域防災において重要な要素となります。

さらに今後は、単なる「災害地視察受け入れ」から「防災ツーリズム」への移行を図っていかなければならいと考えています。被災地を視察し、災害を学ぶことに加え、地域の観光資源や、特産品にも関心を持ってもらい、災害によって町が疲弊していくのではなく、さらに元気になることを考えていかねばなりません。

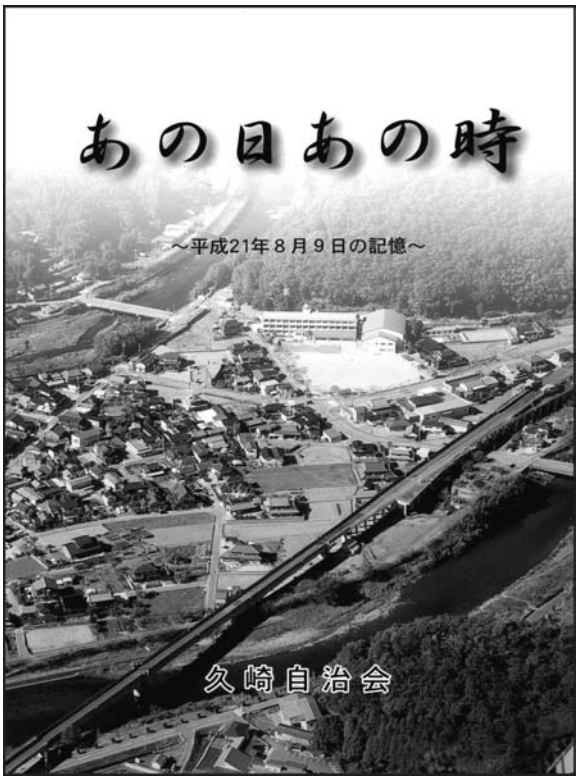
先人たちが災害に、負けることなく守ってきた地域に新たな活路を見いだして地域振興を促し、ふるさとを次世代につなぐことが現在生きる私たちに課せられた事だと考えます。

災害視察受け入れの様子

おわりに・・・

繰り返しになりますが、平成21年災害は未曾有の大災害であり、住民に絶望感、無力感、疲労感、不安感さまざまなストレスを長期にわたり与えた出来事でした。

住民による記録誌作成事業はそのような事実を後世に伝えたいと行いました。また、出来上がったことで事業が終了したのではなく、今後、地元をはじめとする学校教育、地域の防災学習や他地域の方々へ体験が伝わることで私たちが行った事業が意義のあるものになると思います。

今後、さまざまな場面でこの記録集が活用されていくことを期待しています。

佐用町久崎自治会
文責　高見　浩樹